

C-9 造花の系譜 古代造花(一)「ウズ」その周辺

昭和廿大短大 岡野都 O 麗翻るり子

目的 最近アート・フラワーとして服飾造花の製作が盛んに行われているが、一体造花はいつ頃から作られ、どのような系譜をたどったのであろうか。先づ、古代における草木観、そして造花発祥の意義、名称、形態、用いられ方について調査し、現代造花と比較検討することを目的とした。

方法 古代造花の遺品は現在皆無といってよい。従って、実物による考察でなく、古事記から新古今和歌集に至るまでの古典から造花に関する事項を抽出し、絵画・服飾史の立場から裏付け、考究した。

結果 ①古代における草木観は今日の観賞用とは異なり、霊力のある神聖なものと考之、殊に常緑樹は神との交渉の依代として神聖視されたことが「ヒモロギ」などに見られる。②草木を身につける最古の形態は「ウズ」、「カヅラ」である。装身の目的と共に植物の生長の呪力を人間に感染させ、長寿を願う類似呪術として用いられていたが、五世紀中期になり、唐から金銀細工の術が入り、唐風にならって金属製の造花「簪」として冠に用いられた。③一方、草木を手折り髪に飾る習慣は「髻華」と呼ばれていたが、万葉時代に至り、おあらかな心情もうつつして花をかざす「カザシ」に転じた。④以上のように、古代造花の原型は服飾を目的としたものでなく、髪飾り又は、冠の飾りとして用いられていた。